

「1950年代教育史」研究部会（第16回）

日時：2017年6月30日（金）13:00～15:20

場所：野間教育研究所 2F 閲覧室

出席：米田俊彦・大島宏・須田将司・鳥居和代・西山伸 各兼任研究員

吉久知延所長・川上智子

欠席：金沢千秋

内容：研究員研究報告

(1) 大島宏：『〈高卒当然社会〉の戦後史』（2014年 新曜社）を読む

◆1960年代がメインではあるが、第1～2章の黎明期に50年代も考察されるため、紹介

・本書の意義①日本全国にあるローカル・コミュニティの構造の理解にむけて

②日本の教育における平等観の再検討

③日本におけるプライバタイゼーションの読み直し

・第1章 新制高校という制度は内部に大きな多様性と地域性をはらんで出発

・第2章 高卒学歴の意味が「行けば得るところ」から「行かないと損するところ」へ変化。「だれでも高校に通える社会」の実現は私立高校の拡大によって可能となった

*視点・手法の参考になった

*進学率の差がいかになくなったかとの考察のため、視点が一方向になっている

*数字の動向のみでなく、社会・政治との関わりも必要では？

*50年代に構造が変わったのかを確認していく（戦前からの格差も見る）

(2) 鳥居和代：富田竹三郎の中学校長期欠席問題の研究（1950年代初頭）について報告

◆富田竹三郎の専門は教育方法学。1950年代初頭の農漁村の長期欠席に関する研究は教育現象の「社会的」な実証研究という位置づけ。その後は全く触れられていない

・「中学校長期欠席生徒集団の地域的社会的背景」（1952.5）

・千葉県長期欠席者分布（全国的にも同じ傾向）について

*臨海町村：連続して長期（91日以上）欠席が多い 農村：断続的な欠席が目立つ

・「漁村における長欠席の現象」（1953.8）

*小学校での長欠は病気が多いが、中学校になると、家業の手伝いが圧倒的に多い

*特に、「不就学」（200日以上／年間授業日数210日前後）に近い長期欠席者

◆地域社会的背景から長欠現象を分類し捉えようとしたにもかかわらず、要因をとくに親の教育への「無関心・無理解」に一般化して結論づけている。九十九里浜沿岸の背景、米軍基地問題（演習による漁獲高の減少等の影響）への言及がない